

『国府台戦記』小考

——軍記の交貌と冷泉の物語——

加 美 宏

(1)

鎌倉期の「平家物語」、南北朝期の「太平記」という二つの高峰を産み出した軍記もの文芸は、室町期以後もおびただしい数の作品を生産し続けるが、室町期におけるその大まかな展開を、かつて三つの方向に分類して整理してみたことがある。⁽¹⁾

その一つは、「明德記」「応永記」「永享記」「嘉吉記」「新撰長祿寛正記」「文正記」「応仁記」といった年号を冠した一連の作品群で、「明德記」あたりでは、軍記もの文芸としての骨格や形象が認められ、語りものとして受容もされているが、それ以後に内乱の実録・合戦中心の歴史記録といふべき方向に変質していったものである。⁽²⁾

もう一つは、「曾我物語」「義経記」或いは「清水冠者物語」「師門物語」「村松の物語」「堀江物語」などのような軍記もの文芸の派生的作品群で、お伽的ないし唱導的な英雄物語・武家物語に展開してゆく方向である。⁽³⁾

つまり「平家物語」や「太平記」のような軍記もの文芸の最高揚期においては、戦いを中心とする歴史過程と、そこに登場する多様な人間像とが統一的に把握され、一つの軍記文学的世界を形成していたのであるが、室町期の軍記ものに至ると、戦いそのものは戦いを中心とした歴史を主として叙述する方向と、戦いや闘争にかかわった個々の人々や英雄の事蹟を物語る方向という二方向に大きく分離してゆく傾向が認められるということである。

そうした大勢の中にあつて、なお右の二方向を統一的に把握した形象しようと試みている一群の軍記ものが存在する。「大塔物語」

「結城戰場物語」「鎌倉殿物語」「笹子落草子」「中尾落草子」「國府台戦記」といった物語的性格の強い地方軍記の類で、ほかに嘉吉の乱に材をとった「嘉吉物語」加賀における長享の一揆を描いた「官地論」などもこれに加えてよいであろう。これらは、ほとんど地方の局地的争乱に材をとった小粒な作品ではあるが、合戦・争乱の叙述が、なお作品中の重要な位置を占めていて、それが作品の主題やモチーフと深いつながりをもち、しかも主として後日談の形で、争乱にかかわった人達、とくに敗北者とそのゆかりの者達の運命や悲劇を詳しく追跡し形象しているという点で、前記の二方向をとともかくも統一的に扱えているとすることができる。また作品の形成や享受の過程で、語りとかかわりがあったのではないかと推定されるものが多い。こういった意味で、これらの作品群を軍記もの文芸の室町期における正統的な継承者に位置づけてみて、これを第三の方向と考えてみたのである。

(二)

たしかにこれらの作品群は、いずれも合戦記をふくんでいるし、その合戦の惹起された由来を尋ね、その原因との連関において合戦の過程や結末・余波を追求するという因果論的把握法をとっている

ものが多く、なお軍記もの文芸の伝統的特質を保持していることは認められる。

しかし作品の中心は、すでに合戦記そのものにはなく、むしろ合戦の敗者をめぐる後日談が眼目をなしている落城・滅亡の物語といった性格が強まり、語りや唱導、とくに女性のそれが作品形成に大きく関与して情情的哀調の濃い作品となっているなど、「平家物語」「太平記」にみられた叙事的な歴史文学としての性格は、大きな変質を余儀なくされていることも見逃し得ない事実である。

室町期における軍記もの文芸の継承と変質を追求する上で、この第三の作品群が重要な意味を持っているという考えは今も変わらない。「大塔物語」「結城戰場物語」「笹子落草子」「中尾落草子」については、つとに坂井衡平氏（『新撰國文学史』中巻・大正十五）や後藤丹治氏（岩波講座「日本文学」室町時代書目解説、昭和七年）によって紹介されているし、「嘉吉物語」「官地論」についても、近時和田英道・青山克弥両氏らの作品研究が進められているが、『國府台戦記』のみは、未だ軍記ものとして注目されたことを聞かない。そこで、かつての拙稿「大塔物語小論」の統篇的な意味において、ここでは「國府台戦記」をとりあげてみたいと思う。

室町期というよりは、戦国期にふみこんだ時期に生まれたこの作品は、後にみるように先行軍記もの文芸的特質を残しながら、他面

その形成に女流芸能者の関与した形跡があり、謡曲・古浄瑠璃といった語り物や民間文芸の影響もうけて、きわめて抒情性の濃い物語に装飾をよけている。室町・戦国期における軍記ものの文芸の展開や特質を典型的に示している作品の一つであると考えるが、一般にはほとんど知られていない作品であるから、その書誌や内容を順次、紹介しながら、問題点を検討するという形で論をすゝめることにしたい。

(三)

「国府台戦記」は、いわゆる国府台合戦に材をとっているが、この合戦は、天文七年（一五三八）十月五日、北条氏綱軍が、足利義明・里見義堯連合軍と下総国府台（現千葉県市川市内）に戦い、これを破ったもので、十六世紀中葉における関東の覇権を占うに足る重要な一戦であった。北条氏は本拠の小田原から、しだいに東に勢力をのばして関東制覇をめざしており、一方、前の古河公方足利高基の弟で、下総国小弓（現千葉県市生実）に居城をかまえて小弓御所と呼ばれた足利義明も、反北条の一大勢力であった安房の淺族里見義堯と結び、古河公方に替って関東の権柄を掌握しようとする野望を抱いていた。この両者の決戦は北条方の快勝に終り、義明父子は

討死、義明の末子と里見は安房に敗走して、北条氏の関東支配は大きく前進することとなるのである。

この国府台合戦に材をとった軍記ものとして、「国府台戦記」のほか、「小弓御所様御討死軍物語」と題する一書も残されている。この書は巻末に「天文戊戌十月二十五日」とあり、これを成立時点を示すものとみなせば、合戦後わずか十九日目に成ったことになるが、事実、「国府台戦記」などに比すれば、史実的に正確なところも見うけられる。題名を一見すれば、小弓御所義明討死の物語を主眼としたものごとく見えるけれども、実際には、むしろ勝者たる北条方の動静に詳しく、随所で氏綱を賞揚しており、北条方にゆかりのある者の手になるのではないかとみなされている。当面、「国府台戦記」に焦点をあわせてみたいと考えているので、この「小弓御所様御討死物語」についての考察は、別の機会にゆずりたいと思う。

(四)

次にこの「国府台戦記」の書誌的な事項について簡単にふれておくこととする。本書は「鴻台戦記」（宮内庁書陵部蔵統群書類従原本外題）、「国府台合戦」（静嘉堂文庫蔵中山信名筆写本外題）、「鴻

之台合戦」(島原松平文庫蔵本外題)などとも呼称され、また「笹子落草子」「中尾落草子」と合綴された形で、「国府台笹子中尾草子」(旧彰考館文庫蔵本・内閣文庫蔵一本)とした本や、永禄七年(一五六四)の第二次国府台合戦を叙した「鴻台後記」に対して、「鴻台前記」とする場合もあり、書名は必ずしも確定していない。現存諸本は、「国府台御没落事」という内題を持つ点では、みな共通しているから、むしろこれが本来の書名ではなかったかとも考えられるが、ここでは一応、続群書類従や改定史籍集覧などが採っている、本書の通称となっている「国府台戦記」の呼称に従うこととしたい。

作者は不明であるが、その内容・筆致から推考すると、国府台合戦の史実をかなり正確にふまえながらも、本書の主眼とするところは、「国府台御没落事」という内題にも示されているように、小弓御所・明方の没落とその遺族らの悲哀を叙述することにあるとみられるから、少くとも小弓方に同情的な心情をもった人物であることはたしかであろう。

成立時期も確定していないが、本書の巻末に「天正三年乙亥八月十一日」とあり、この日付を一応本書成立の時期を示すものとみたい。天正三年(一五七五)は国府台合戦より後三十七年目にあたる。静嘉堂文庫蔵中山信名筆写本巻末における信名の注記には「天

正三年乙亥八月十一日一木此年号ハナクテ此本及笹子落中尾落ノ三書ヲ合シテ天正十五年ノ奥書アリ」とある。これらを勘案して、本書の成立をほぼ天正年間とみなすことは許されるのではあるまいか。

現存の写本には、内閣文庫蔵(→本・同)本・静嘉堂文庫蔵本・東京教育大学蔵本・島原松平文庫蔵本・神宮文庫蔵本などがあり、これらの諸本は、「国府台戦記」単独の形と、「笹子落草子」「中尾落草子」と合綴した形の二系列に大別できるが、本文詞章の上では、諸本間に大きな異同はみられない。本稿は続群書類従完成会本「国府台戦記」に拠って論をすすめる、異同のある場合は他の諸本を参照することとしたい。

(五)

さて、「国府台戦記」は、まず「抑下総の困とふのだい御戦の年号をかながふるに、天文六年十月上旬の比とかや」という書き出しで始まっているが、この天文六年は、「快元僧都記」など当時の史料に照らして、天文七年の誤りであることは明らかである。このような明白な年代の誤りは、「……の比とかや」という伝聞婉曲の表現とともに、本書の述作が合戦当時よりかなり時日の経過した時点で

あること、本書がこの合戦の正確な記録をめざしたものでないことなどを物語っているといえよう。

続いて、「まことに御所さま御滅亡の由来をくはしく尋ぬるに、かの君は清和天皇の御末、政氏將軍の次男高基様の御舎弟義明とぞ申ける。御兄弟の御中和にならせ給ひて、みちのく御一見とぞ聞えける……」と語りおこして、奥州流浪の足利義明が、上総武田氏の一族真里谷怒逆に迎えられ、小弓城の原胤隆を攻略し、ここを居城として房総に勢威を振い、「関東の將軍」たらんとしたと、このことは必然的に、同じく「関東を我手にいれん」としていた北条氏綱との衝突を招くこととなり、ついに國府台の決戦に至ったという義明没落―國府台合戦の由来を詳しく物語っている。

ここで注目されるのは、「御所さま御滅亡の由来をくはしく尋ぬるに」とあるように、本書の主眼は、國府台における小弓御所足利義明対北条方の合戦記述そのものにあるのではなく、あくまで義明の滅亡を物語るところにあること、すなわち本書は國府台合戦記というより、正確には義明滅亡記の一環として義明遺族らの動静を物語る後日談が本書の重要な構成要素をなすに至る必然性も出てくるわけである。

また、義明滅亡の由来を尋ね、その相関的・因果的な展開として

國府台合戦と義明没落を位置づけようとしていること、主人公にあたる義明の出身や履歴から語りおこしていることなどは、いずれも、「將門記」「陸奥話記」以来の軍記もの文芸における伝統的手法を継承したものと見えよう。

(六)

このような合戦由来の記述をうけて、当日の合戦記述が展開される。房総勢を率いて江戸川の東岸國府台に布陣した小弓御所義明は、北条軍を河中でたたけという部下の進言をしりぞけ、二万八千余騎の大軍をやすやすと渡河させたため、まんまと北条の包圍作戦にかかって壊滅するに至るのであるが、そういう兩軍の軍議や布陣、合戦の有様が、例えば「(北条方の金谷奇は)老武者とは申せども、驚くまたかのごとく也」とか、「(北条方が)御所せいを待たる有さまは、いまだ時にはあらねども、立田あそびのには鳥の、共を待がごとく也」とかいいたユニークな比喻表現をまじえながら、また「痛は、しや、両きみ(義明の嫡男と弟元頼をさす)は、こころはたけくましませんども、御手はおほくおひ給ふ、御身もつきはて、終にはうたれ給ひけり」(傍点筆者)といった「説経節」風の感情移入をも行ないながら、詳細に描き出されている。

しかし何といつても、この合戦記の庄巻は義明最後のくだりであろう。たけ七尺に及ぶという北条方の安藤なる武者を、「やさしき者の振舞やと、しばらくあひし給ひて、かぶとのまん中ふたつにさつと打たまへば、あしたの露ときえにけり」といった剛勇ぶりに、しばしは敵も寄りつかなかつたが、横井神助なる強弓に鎧を射ぬかれて、「さしもにかうなるきみなれども、御ころもみだれつ、両眼を見出し給ひて、北条が旗本をはつたとみらせ給ひて、七尺三寸の御劔をつえにつかせ給ひて立死にこそうせ給ふ」ということになる。しかもなお松田弥二郎が首を取るまで、しばらく近づく者もいなかったという。その最期のさまは、「義経記」における弁慶の立往生を想起させよう。

このあとになお、敗れた義明方の二つの挿話が語られている。一つは義明の愛馬鬼月毛が、主討たれて後、戦場より五十余里の道を馳せ帰る黄なる涙を流しつつ嘶いて、小弓の女房らに義明の最後を告げんとしたという話であり、これには「古しへ、義経やしまのうらの合戦に、佐藤次信御矢代に立ければ、太夫くろを給ひける。この馬次信がしがいを三度めぐり候ひて、終にむなしくなりはて、めでたに行とぞうけ給はる。夫はけんの御代、これは末代愚成世にかゝるためしも有けると、上下万民をしなべて、袖をしぼらぬ人はなし」という評語が加えられている。義経が与えた太夫黒なる馬が、

次信（嗣信）のなきがらを三度めぐって死んだという話は、「平家物語」巻十一「嗣信最期」ともまた異なる伝承である。

もう一つは、辺見山城守という手負いの老武將が、義明に続いて討死せんとしていた佐々木・逸見・佐野・町野らを必死におしとどめ、小弓に残っていた義明の遺子乙若を落す役を承知させた上で、敵將山中修理亮を招き、「能々かしく仕給へて、腰の刀をするりとぬき、腹十文字にかき切、五ぞうをつかみ出し、はやいとま」と頼む。情を知る山中は「うつわれもうたる人ももろ共におなじうてなのなかにならまし」と詠んで介錯したが、「かの人のさいこのしぎ、ほめぬ人こそなかりけれ」という話である。ここには、切腹して五臓をつかみ出すといった血なまぐさい現実性と、敵方が歌を手向けて介錯するという風雅とが同居しているが、これは「平家物語」にはみられなかった、「太平記」以後における室町・戦国軍記の一特徴といつてよからう。

(七)

国府台合戦の信頼するに足る史料とされている「快元僧都記」(鶴岡八幡宮寺供僧職快元日記)天文七年十月条によると、この合戦の経過は、

二日、向_二下総_一氏綱父子進発、是小弓上様_〇明、里見引率、鶴台御出張アリ、同六日氏綱江戸城出陣、同七日合戦、敵上様井御曹司基頼公三大将、椎津、村上、堀江、鹿嶋等、面々鏖戦、氏綱先陣志水、狩野、笠原、遠山、伊東等防_レ之、忽_ニ攻戦、小弓衆打負、御曹司様、上様御舍弟基頼御討死、小田原方安藤備前、上様御手ニ懸り討死、三浦城代横井神助、上様_〇明奉_ニ討落_一、松田弥次郎御首奉_ニ討取_一、逸見山城祥仙、為_ニ山中修理亮_一被_レ誅、凡_ニ討死_一百四十余人、其外御所方佐々木源四郎、逸見八郎、佐野藤三、町野十郎等遁_ニ戦場_一、上様末子御曹子奉_レ伴、則小弓城焼払、房州落行畢、怨_ニ里見_一云々。

といったものであった。⁽⁵⁾

この簡略で客観的な記録と対比してみると、「国府合戦記」が、「快元僧都記」に記されたような史実をかなり忠実にふまえながらも、単なる実録の域にとどまらず、小弓方の没落のさまに焦点を集中して、その悲劇のディテールをウィヴィットに形象しようとする、いわば文芸化への志向を有する作品であることが明瞭に浮びあがってくるであろう。そういう本書の特色が、もっとも明確な形をとっているのが、合戦記に続く合戦後日談の部分である。

前記逸見山城守の遺托によって小弓に馳せもどった佐野・町野らは、義明の遺子を奉じて房州へ落ち、二百八十余人という女房らも

みな離散したが、「あるいは駒のひづめにかゝり、むなしくならせ給ふも有。或は土民の手にわたり、よしなきやうになるも有、是や平家の大将宗盛のみやこおちも、これにはいかでまさるべき」といった悲惨な有様であった。

この後に、「ここに物のあはれをとゞめけるは……」という説経節や幸若(舞々)に顔出する起句に導びかれて、二つの女人哀話が語られている。その一つは、義明最愛の人であったあいすの君が、一度は門外遙かに落ちながら、「貞女両夫にまみえず」と御所へとってかえし、「いまみのうへにしらまゆみ、ひきはかへさじ我心、きみ諸共にわたりかは、ふち顔のなみをしのがん」と書き置いて、「高声に念仏申、したを喰切、はきすて、きたまくらにふし」という話である。

この折、あいすの君が遺書に書きつけたという

おもひいるみはふか草の秋の露たのみしきみは木がらしの風

の歌は、「房総叢書」第一巻所収「国府合戦記」の頭注が指摘しているように、「新古今和歌集」巻十五所載、藤原家隆の

思ひいる身はふか草の秋の露たのめし末やこがらしのかせ

をふまえたものであることは明らかであろう。この歌は後鳥羽院以下十七人の新古今歌人の選集「自撰歌」などにも収められており、かなり知られた作品と思われるが、それにしても作者の教養と文芸

化への志向が、ここにもうかがえよう。

(八)

さて、後日談の第二であり、女語りともいうべき本書の一面を最もよく示しているのが、討死した義明嫡子の乳母れんせいをめぐる物語である。

れんせいは、我が君父子討死を悲しむあまり、「せめて我きみの御しかばねを見まいらせん」と、夜更けに小弓を発って戰場跡をめざす。この小弓から若君(義明嫡子)の討死場所という相模台(国府台の北、現松戸市内)へのれんせいの旅は、「人目をつつむ事なれば、小弓をばまだ夜ふかきに旅立て、ゆけばゆふきのうらなみに、神ももすそもしほたる、これやめいどのさかひ、わたりがはともおもひやる、三川を越て過行ば、これやいなけのまつ山や、その松風もみにしみて、心ほそくもけみ河の……あしに任て行程に、いち河ふねのわたし守、我おもふきみはありやなしやと事とへば、たれをまつどのをかの辺や、さがみだいに着しかば、若きみさまの御べう所にまいりつつ……」といった道行文をもって叙せられている。

れんせいは、戰場跡の若君廟所を弔いつつ、さまざまにかきくど

くが、むかし西行が讃岐に流された崇徳院廟所に詣でて詠じたという歌を思い出して、

よしや君むかしの玉の床とてもかゝらん後は何にかはせん
と口ずさむと、塚の下から若君と思われる声で、

はま千鳥あとはおゆみにかよへどもみは草野へに音をのみぞなく
という返歌がかえってくる。

右の西行の歌は、「山家集」巻下、雑に、「白峯と申ける所に御墓の侍けるにまゐりて」という詞書とともに収められているものであり、後の「はま千鳥」の歌は、「保元物語」巻下、「平家物語長門木」巻四、「源平闘諍録」一之下、「源平盛衰記」巻八、「沙石集」巻五末などに崇徳院の讃岐での作として載せられている

浜千鳥あとは都へかよへども身は松山にねをのみぞなく
という歌を改作したものであろう。

ただし、「保元物語」や「長門木平家」「闘諍録」「盛衰記」などは、「浜千鳥」の歌は、崇徳院が生前、御室の覚性法親王に贈ったものであり、いっぽう「よしや君」の歌は西行が院の墓前で詠んだ歌であって、両者は全く別箇に詠まれたものとしているが、「沙石集」のみは、西行が墓前で、「よしや君」の歌を口ずさむと、それに答うるごとく、「浜千鳥」の歌が聞えてきたとしている。したがって、「国府台戦記」のれんせいと若君の歌応答は、「保元物語」な

どの軍記物語よりも、「沙石集」の説話にすこぶる近似した状況の設定を行なっているといえる。

(九)

やがて廟所の内から若君の亡霊が甲冑を帯してあらわれ、乳母れんせいに「なんぢこれまで我跡をとむらふ事、うれしきよ、みづからはしゆらだうに有ながら、たましひはてんにあって、大くんしやうといへるほしとあらはれ、ふたゝび此かに生をうけ、八せうのしゆくんとなるべし、なんぢあまりになげく事なかれ」と告げ、さらに房州に落ちのびた弟の乙若に伝言せよといって、父義明が滅亡するに至った三つの原因をあげる。それは、義明が威猛にまかせて天道を恐れなかったこと、古河公方総領家をさしおいて関八州の主君となる野望を抱いたこと、義明を奥州より招聘しながら、義明から勘当されて死んだ真里谷の怨霊がたたりをなしたことの三点である。この三点は、「北条記」(一名「小田原記」)「相州兵乱記」(卷二)では、国府台合戦前の北条方軍議において、軍師根来金石斎が、義明の三矢としてあげているものである。「国府台戦記」と「北条記」のいずれの形が古態を示すのかという点については、にわかに判定できにくいように思われる。

若君の亡霊かられんせいへの伝言が終るや、たちまち北風と共に大鼓や関の音が響きわたり、若君の叔父基頼の音が、「わかきみは、などおそなはり給ふ、いまこそしゆらの時なれ」と呼ばわり、若君も「こゝろへたり」と走り出てゆく。そしてこの後、次のような文をもって本文が結ばれる。

れんせいも御跡をしたひ奉りしに、しのゝめもあけゆけば、草ぼうぼうとして、塚のみ残れり、れんせいけふさめたるこちして、なくなきそこを立去て、有山寺にはせまいり、三十一と申には、髪そりおとし、こきすみぞめに身をやつし、諸国七だうめぐりつつ、れい仏・れいしやを伏拝み、かの御ぼたいをとぶらふ事のははれなり、哀なり。

右の文を一統して気づくことは、観世元雅作といわれる謡曲「隅田川」との類似であろう。「隅田川」は、人買いにさらわれた愛子梅若丸を尋ねて東國に下った狂乱の母が、すでになくなっていた我が子の塚にめぐりあって弔い、そこで子の声を聞き、幽霊をみるが、手をとったと思うと消えうせて、あとには塚の上の草が茫々と茂るのみだったというが大筋であるが、れんせいが若君の死所をたずねて、その亡霊と会うが、しのめと共に亡霊の消えうせて塚のみ残るといふ本書の構成は、この「隅田川」に基づいて構想されたとみられるばかりでなく、文章表現においても、「隅田川」に拠っ

たと思われる箇所がある。「岡田川」の結び部分に「……しののめの空もほのほのと、明け行けば跡絶えて、わが子と見えしは塚の上の草茫茫としてただ、しるしばかりの浅茅が原と、なるこそあはれなりけれ、なるこそあはれなりけれ」とあるのが、それである。⁽⁶⁾

また年少にして非業の死をとげた者の遺族・縁故者、或いはその死に立会い、見聞した者が、出家・廻國して死者を供養するというのは、「曾我物語」「明德記」「結城戰場物語」「大塔物語」といった、唱導や語りとかかわりを持つと考えられる室町軍記に共通してみられる特徴的なパターンであるが、この乳母れんせいの出家・廻國による若君供養の物語も、その典型的なケースといえよう。このことは、逆に本書が女性による唱導や語りと交渉を持つことを暗示するものともいえるが、この点については、後で改めてふれることにしたい。

(十)

これまで作品構成の順を追いつながら、「国府台戦記」の文芸的な特質といったものにふれてきたが、ほかに、随所で故事・説話の類を引いて叙述をすすめていることなども、本書の一特色としてあげられよう。例えば、合戦の舞台となった国府台という地名の由来

を、日本武尊に浅瀬を教えた功により、この山を賜ったという湖の説話によって説き、瀕死の辺見山城守は、「先王のほろぶを見て、後王に忠せよ」という黄石公の言葉を引いて味方の侍に遺言し、また小弓御所義明に先立たれた寵姫あいずの君は、かつての二人を玄宗と楊貴妃になぞらえて書き遺すといったぐあいである。こういった故事・説話類の多用は、先行する軍記もの文芸の伝統的手法の一つであり、本書の文芸化志向の一端を示すものといえよう。

さらにいま一つの重要な特質として、主に本書の後日談の部分に、抒情的な哀調といったものが強く底流していることをあげねばなるまい。これは合戦記というよりは淡亡記という色彩の強い本書の性格から、必然的にもたらされる哀調ともいえるが、その哀調が最も高揚されているのは、やはり道行文や和歌を交え、謡曲「岡田川」などを模して構成されたと思われる乳母れんせいをめぐる物語であり、本書の抒情的哀調の根源は、この物語にあるといつてよからう。

前述のように、このれんせいの物語には、本書と女性による唱導や語りとのかかわりをさぐる一つの鍵が存在するように思われるし、また、この物語が加わることによって、本書は合戦記から滅亡記へと性格を変えていったのではないかとさえ考えられるので、以下れんせいの物語について少しく検討を加えてみたいと思う。

れんせい物語で、まず問題としたいのは、れんせいという乳母の呼称である。「れんせい」は恐らく「冷泉」であろうと思われれるが、じつは「浄瑠璃物語」をはじめとして、中世の物語・語りもの類には、この名を持った乳母や侍女が登場して、なかなか重要な役割を果している例が少なくないのである。

浄瑠璃姫(浄瑠璃御前)を主人公とした「十二段草子」などのいわゆる「浄瑠璃物語」では、とくに、吹上の浜において殞死の義経を姫が救う「吹上」や、義経が平家追討の途次、矢作に寄って冷泉から姫の死を聞く「五輪砕」の段において、姫の乳母であり侍女であった冷泉が大きな活躍をみせている。また中世小説「もろかど物語」でも、主人公もろかど(師門)の妻浄瑠璃御前の守り役として侍女冷泉の役割は大きいし、同じく中世小説「昔鶴」においても、昔御前と義経の恋のとりもち役をつとめるのが、御前の乳母冷泉なのである。

こういった浄瑠璃物・義経物のほかに、例えば、中世小説「清水冠者物語」でも、冷泉は、清水冠者の妻大姫に誕生の時より形影あい伴った乳母として活躍し、姫の死後七日にして「思ひ死」しているし、代表的なお伽草子の一つ「鉢かづき」にも、鉢かづき姫と結ばれる宰相君の乳母として登場しているのである。そして、この「国府台戦記」における乳母れんせい(冷泉)の物語である。

このような数多くの作品における冷泉という名の乳母・侍女の活躍は、偶然の一致にすぎないとみるべきであろうか。じつは冷泉という登場人物、そして彼女の活躍する作品群には、いくつかの共通項のようなものが存在するようである。

その第一点は、これらの作品群が、少なくともその原型は、ほぼ室町期に成立したと考えられている作品ばかりであり、「国府台戦記」の場合を除けば、いずれも室町期から江戸初期にかけて、かなり広範に流布した物語・語りものであるということである。これらの作品のうち、「昔鶴」などは物語草子として読まれたばかりではなく幸若舞曲として演ぜられた形跡もあり、室町期における「浄瑠璃物語」が、いわゆる浄瑠璃節で語られたかどうかはともかく、座頭などによって語られ、広く巷間に流布した物語であったことは確かかなようである。

第二点は、この冷泉の活躍する作品の舞台が、「鉢かづき」の河内国交野の辺を西限として、三河の矢作・駿河の吹上(浄瑠璃物語)、鎌倉(清水冠者物語)、下総国府台(「国府台戦記」)、奥州栗原三の迫(「もろかど物語」)といったように、東海道筋から東北

にかけての地域に集中していることである。「昔鶴」の場合も、元来の舞台は京であるが、義経を追って皆鶴も下ったという伝承が、東北北方にいくつか残されている⁽⁹⁾。

第三点は、冷泉の名を持つ女性が、つねに貴人・貴女の乳母・侍女として登場し、胎役ながら主人公の守り役・相談役、或いはその死の立会人・供養者などとして、いずれも重要な役割を果たしていることである。「浄瑠璃物語」の主人公浄瑠璃姫なども、母は矢作の長者(遊女)であるが、父を三河国司だった伏見の源中納言兼高とし、鳳来寺峯の葉節に折誓して生れた「申し子」として、貴種化を行なっている。

さらにもう一点あげれば、冷泉と仏教信仰・唱導との結びつきである。「浄瑠璃物語」の「五輪碎」の段において、浄瑠璃姫の死に至るまでの物語を義経に語る侍女冷泉には、女流唱導者の面影が感じられるし、室木弥太郎氏は、この段自体、冷泉が姫の菩提を弔ったという矢作冷泉寺の縁起物ともいへべき性格を持つことを指摘されている⁽¹⁰⁾。

また「もろかど物語」の中で、信濃善光寺の縁起を長々と物語る冷泉に、善光寺系の女唱導者の投影がうかがわれることも、すでに白田甚五郎氏・福田晃氏の説くところである。「国府台戦記」における冷泉の物語も、唱導文芸的性格を持ったいくつかの先行軍記物

語類と、すこぶる似た趣向や文章をもって物語られており、唱導との結びつきを考えないわけにはゆかない。

この「国府台戦記」の冷泉障は、例えば、「曾我物語」で、虎御前が愛人十郎の討死した富士の裾野跡を弔った後、出家して諸国を念仏供養して廻る話や、「大塔物語」において、十三才で討死した常葉八郎なる少年の母が、悲嘆の余り出家して戰場跡を訪ねた後、善光寺に入る話などと全く同趣の物語である。またそうした母や乳母の後日談を和歌・道行文・謡曲の詞章などを効果的に用いながら、哀調の浪い抒情的文体で物語るところなども、「結城戰場物語」「鎌倉殿物語」「大塔物語」などと共通しており、女性とかわる唱導物語の典型的なものの一つといえそうである。

(十二)

このようにみると、中世末頃の少なからぬ物語草子類に登場する冷泉なる人物は、共通の属性のようなものを持ち、その作品にもある種の共通項が存在していることが理解されよう。したがって前記の諸作品において、申しあわせたかのように冷泉名の乳母・侍女が大きな活躍をみせているのは、偶然の一致というよりは、これらの諸作品が相互に何らかの交渉を持ったために生じた一致とみな

す方が妥当なように思われる。

では冷泉の活躍する前記諸作品の間に、どのようなつながりを考うべきであろうか。この点を解き明かす上で、もっとも有効な手がかりとなるのは、やはりこれらの作品の作者・伝播者の問題であろう。これに関しては、さきにもふれた白田甚五郎・室木弥太郎両氏が重要な示唆を提示されている。

白田氏は「小栗照手鏡の周辺」の中で、冷泉が、その名のごとく水にかかわる伝説の主人公として各地に名を残しており、これはヒロインに仕える侍女が伝説の主人公にせり上った例であることを指摘された上で、「『もろかど物語』の伝承者の血統は冷泉と認めるべきであろう」とされ、さらに作中で冷泉が滔々と善光寺の縁起を語っていることについて、「ここに、れんぜいの種姓が虎御前の如く、善光寺につながる比丘尼であることをおのづから披露したと考えられる」といわれている。

また室木氏は、「浄瑠璃物語と民間説話」の中で、「浄瑠璃物語」の「吹上」「五輪砕」における冷泉の大きな活躍は、この物語の創作者・管理者とかかわるのではないかと考えられ、とくに矢作地方に冷泉の遺跡・伝説が非常に多いのは、「冷泉派」ともいうべき女流芸能者」が、この地を中心に大いに勢力を張った時代があったのではないかと想定されている。

この両氏によってとりあげられた「もろかど物語」と「浄瑠璃物語」は、ともにヒロイン浄瑠璃姫と侍女冷泉が影の形に随うように相伴って活躍しているのであるが、両作品の関係は、福田鬼氏が、「もろかど物語」の成立に関して、「この物語の発生は、やはり廃虚の城砦にうごめく亡霊が、持巫女の口をかりて、その執心を表白したときにあると思う。また、この物語の成立は、その巫女の語り」が浄瑠璃姫の物語に触れたときと言わねばなるまい」と説かれたように、在地の語りプラス「浄瑠璃物語」→「もろかど物語」という形をとったものと思われる。

浄瑠璃姫と牛若（義経）、そして姫の忠実な乳母であり侍女である冷泉が活躍する「浄瑠璃物語」は、『宗長日記』『守武千句』『言継御記』『言経御記』などに「浄るり」「上るり」と見えて、十六世紀頃には、すでに座頭の語り物として、「平家物語」と並ぶ人気を博し、広く流布していたようである。

他方この物語は、白田・室木両氏が示唆されているように、民間の女流唱歌家・芸能者によっても語られ持ち運ばれていたものと考えられる。室木氏のいわれる「冷泉派」の存在は確證できないとしても、時には彼女ら自身が「冷泉を名乗って、自ら立会ったヒーローやヒロインの悲劇を物語ったことがあったかも知れないのである。

『宗長日記』享祿四年（一五三二）九月十三日条には、小田原の

旅宿で、「小座頭あるに浄りをうたはせ」とあることからして、「国府台戦記」の成立したと推定される天正三年（一五七五）頃には、すでに「浄瑠璃物語」は、関東地方にも流布していたとみなしてさしつかえあるまい。

(十三)

国府台合戦（一五三八）の直後に成ったとされている「小弓御所様御討死軍物語」にも、小弓御所義明敗死の後、小弓に残された「御合様」や乳母・女房たちの悲嘆のさまや山路に落ちていったり自害したりする惨状が生々しく描かれているけれども、乳母「冷泉」は未だ登場していない。「小弓御所様御討死軍物語」には片鱗すら見せていない冷泉名の乳母が、合戦後三十七年目にして成ったと考えられる「国府台戦記」において、いわば突然登場してきて、後日談の中心的人物にまでせり上っているのは、やはり「浄瑠璃物語」「もろかど物語」「清水冠者物語」など東国育ちの語り物・物語における冷泉名の乳母・侍女の大きな活躍と無縁とは思われな

い。
おそらく国府台合戦の後しばらくの間にまとめられた軍物語（例えば「小弓御所様御討死軍物語」のごときもの）に、謡曲「隅田

川」や「浄瑠璃物語」、或いは説経節などの影響下に形成された乳母冷泉の物語が結合する形で作りあげられたのが「国府台戦記」であったと思われる。

冷泉の弔問の歌に対して、塚の下から若君の返歌があるくだりなども、謡曲「隅田川」の影響ばかりでなく、御曹子の回向の歌に、浄瑠璃姫の返歌がくり返えされる「浄瑠璃物語」五輪砕の段における姫の墓所での歌問答との関連も考えてみるべきであるかも知れない。

国府台合戦の後、在地に生れた軍物語は、もともと北条対足利（義明）の合戦記というよりは、小弓御所義明の滅亡記という性格が強かったものと思われるが、それに後日談として冷泉の哀話加わることによって、いっそう抒情的哀調と唱導的色彩の濃い滅亡物語へ転化していったといえそうである。

そしてこの冷泉物語の原形をつくりあげたのは、やはり「浄瑠璃物語」など冷泉の活躍する語り物・物語を語り歩きながら布教にも従事していたと思われる女流唱導家・芸能者たちであって、彼女らは、忠実なる乳母が非業に死せる若君を弔う冷泉の物語を「国府台戦記」にもたらずと同時に、この「国府台戦記」を自分たちの語り・唱導のレパートリーに加えたものにはがいないと思う。

詮ずる所、「国府台戦記」は、室町期から戦国期に移行した時期

において、明らかに文芸的志向をもって書かれ、軍記もの文芸特有の形態をなお保持しているが、すでにその本質は合戦記というよりも死亡記であり、女流唱導家・芸能者の手に成ったと思われる後日哀話冷泉の物語が作品中の大きな比重を占め、作品の性格を規定するに至っている。

抒情性や唱導性をも著しく強めながら、叙事的な歴史文学としての軍記ものの骨格をからくも残しており、「記」的なものと「物語」的なものの融合をとまかくも保っているという意味において、「国府台戦記」は、小稿の冒頭部で述べた「大塔物語」など室町期軍記における第三の方向の延長線上に位置して、その方向の一つの終着点を示すものであらう。

この作品ではなお統一的に扱えられている合戦をめぐる歴史の叙述と、その合戦にかかわった人々の悲劇的な物語とが、完全に分裂し、作品としての統一感を喪失するに至る戦国期軍記、例えば「瓦林正頼記」またの名「松若物語」などについての検討が次の課題として残されている。

- (1) 拙稿「大塔物語小論—室町軍記研究の手がかり—」文学 昭45・8
- (2) 「将門記」以来、「記」的な流れが、軍記の本流をなしてきた事実は否定できない(注3の北川氏論文参照)。しかし「平家物語」ばかりでなく、「保元・平治」や「太平記」「明德記」においても、記的なものと物語的なもの・説話的なものとが、わちがちがく結びついており、

そこにわが国軍記文学の特質を認めたい。

- (3) この軍記のお伽的な流れについては北川忠彦氏「軍記物の流れ」(文学 昭47・7)が、謡曲・幸若・古浄瑠璃などにも論及しながら展開されている。

- (4) 和田英道氏「勇吉物語」の形成(国文学研究資料館紀要第一号 昭50・3 青山克弥氏「加賀の戦国軍記—「宮地論」をめぐって」金沢女子短期大学学業第十三集 昭46・12)

- (5) 「快元御都配」の引用は「群書類従」第二十五輯(続群書類従完成会本)による。

- (6) 室町軍記と謡曲とのかわりについては、最近今井正之助氏「明德記と道行文」(軍記研究ノート6号、昭51・8)が「明德記」と謡曲との関係を指摘されている。

- (7) 「伊勢守日記」天正十三年九月十七日条(市古貞次氏「中世小説の研究」所引)

- (8) 「宗長日記」享徳四年九月十三日条、「宮経阿記」元龜二年七月二十五日条、「宮経阿記」文證元年八月十五日条など、

- (9) 臼田基五郎氏「義経障の背景」(日本古典総合講座—太平記・自我物語・義経記)所収、昭35・2

- (10) 室木弥太郎氏「浄瑠璃物語と民間説話」因語と因文学 昭33・10(同氏「語り物の研究」を再収)

- (11) 臼田基五郎氏「小栗原手焔の周辺」因学院雑誌 昭35・5
- (12) 福田晃氏「もろかど物語」解説(伝承文学資料集「室町期物語」)所収、昭42・10

- (13) 注11論文に同じ。
- (14) 注10論文に同じ。

- (15) 注12解説の附記。